# 所員紹介

## 2022年 ちもんけんより新年のごあいさつ

理事兼総務部長（主席研究員 兼務）
### 藤 正三

総務という立場で持続可能な組織づくり、働きやすい職場づくりに取り組みながら、そのノウハウを地域の持続発展に向けた取り組みへとつなげていきたいと思います。

事業部長（主席研究員 兼務）
### 池田 哲也

スタッフの年齢や性別、専門分野などの多様性が高まり、以前にも増してオフィスに活気が感じられます。今年度も引き続きご指導よろしくお願い致します。

調査研究部長
### 河北 裕喜

昨年11月、伊勢志摩でワーケーションを体験しました。朝のヨガ体験で苦しんでいる写真です。今年は柔軟に仕事を進めたいです。

研究理事
### 杉戸 厚吉

年齢を重ねても少しでも長く先のことが考えられるように、小さなことでも脳の活性化になることを続けていきたい。今年もよろしくお願いします。

研究理事 兼 首席研究員
（愛知県交流居住センター事務局長）
### 加藤 栄司

マスク姿しか知らない方々とのお付き合いが増えてきました。息苦しさを感じる“顔パンツ”が外せる日が待ち遠しく感じます。

首席研究員
### 春日 俊夫

今年は55歳です。仕事に励みつつ、そろそろセカンドライフに向けた行動も始めようと考えています。いろいろ楽しいことを教えてください!

主任研究員
### 安間 奈巳

今、この場、このとき、楽しみながら、人と関わりながら過ごしていきたいと思っています。今年もよろしくお願いします。

調査役
### 田辺 則人

謹んで、新春のお慶びを申し上げます。寅年ですが、招福の「左馬」の駒を見ながら、過ごしていきます。宜しくお願いいたします。

調査役
### 押谷 茂敏

昨年5人目の孫が誕生。彼らにとって明るい未来をつくっていかないと……。想いを新たにまちづくりの現場に関わっていきます。

研究員
### 村西 崇弘

新年あけましておめでとうございます。テレワークなどの新しい生活様式がもっと浸透していくように頑張ってまいりますので、応援よろしくお願いします!

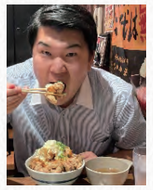
研究員
### 鈴木 瞳

琴線に触れた超築古マンションを購入。リノベ真っ最中です。長年根無し草だったので、まだちょっぴりソワソワしていますが、これからしっかり地域に根ざし励みます!

研究員
### 林 桃子

義実家の車庫を改修して小さな事務所スペースを作りました。地域で何かをしたい欲が高まっています。楽しいアイデアがありましたら是非お声かけ下さい!

研究員
### 藤本 慎介



名古屋に住み始めてもう少しで1年。「つけてみそかけてみそ」が食生活に浸透してきました。今年は中部地域がさらに好きになる気がします!

総務主任
### 石川 桂子

2022年の年明けおめでとうございます。今年は「行雲流水」のような気持ちを持って過ごしたいと思います。一年宜しくお願いいたします。

セミナー担当
### 出口 志穂

市町村ゼミナール、公民連携セミナーなどご参加いただきありがとうございます。今年も「尊尚親愛」の心で人と接することを心掛け、明るく開催したいと思います。

嘱託研究員
### 西村 郁

本誌の編集を担当。マスク姿やZOOM画面の「映えない」素材に苦しみましたが、令和4年は笑顔で直に出会いたい。今年もよろしくお願いいたします。

## 編集後記

50周年記念フォーラムを通じて、20～30歳代のパネラーや来場者の方と中部地域のビジョンについて語り合い、若い世代の新しい発想や価値観に触れる機会となりました。そして、各地のまちづくりの現場で、従来のやり方や枠組みにとらわれない伸びやかなチャレンジの萌芽が生まれていることに、とても頼もしく、楽しみな気持ちになりました。ちもんけんも、多様性と持続可能性を高めながら、次の50年にむけてチャレンジしてまいります（池田）。


「明日の中部」改題 通巻207　ISSN 0918-7413

まちづくり情報誌 ちもんけん Vol.112　令和4年1月1日発行

編集　池田哲也・西村郁
発行　一般社団法人 地域問題研究所


〒460-0008 名古屋市中区栄二丁目2番31号
ニュープラスビル4階
TEL：052-232-0022
FAX：052-232-0020
ホームページ：https://www.chimonken.or.jp
Eメール：office@chimonken.or.jp

地域問題研究所への交通
地下鉄「伏見」駅4番出入口より徒歩3分

まちづくり情報誌

# ちもんけん

Vol.112 中部のミライ

目 次


P2　理事長挨拶 及び 当研究所略歴
P3　中部のミライ創造フォーラム
P7　1テーマレポート＆エッセイ「テーマ：中部のミライ」
P10　市町村ゼミナール開催報告
P12　所員紹介


一般社団法人 地域問題研究所

# まちづくり情報誌「ちもんけん」リニューアル！

理事長
青山 公三

地域問題研究所は1971年（昭和46年）に愛知県認可の「社団法人」として発足し、地域に根差した調査研究を通じ、様々な地域づくりの支援に取り組んでまいりました。

地域問題研究所の設立を主導したのは、当時68歳の「東海地域の将来を憂える民間有志」を自認する清水静造（後に事務局長・副理事長歴任、敬称略）でした。

清水は当時たった一人で（愛知県からの人的応援はあったにせよ）、社団法人の設立からサロン誌「明日の中部」、研究誌「地域問題研究」の発刊、そして今や弊所の看板事業「市町村ゼミナール」の実施まで、設立後3年で現在の地域問題研究所の基礎を構築してしまいました。

設立5年目頃から若い研究員が集まり始め、足で稼ぎ、行動するシンクタンクとして東海地域の市町村、県、国等の調査研究を実施し、地域からも信頼される地位を築いてきました。

2011年（平成23年）には、一般社団法人として新たなスタートを切り、これまでの蓄積を活かし、地域とともに考え行動するシンクタンクとして挑戦し続けています。

設立51年目の2022年（令和4年）、まちづくり情報誌「ちもんけん」をリニューアル致します。本情報誌は、清水が発刊した「明日の中部」と「地域問題研究」の流れを汲み、設立50年を経て新たな時代に対応できる内容を提供し、かつ弊所の会員・職員の交流の場としていきたいと思います。皆様のご支援ご協力を宜しくお願い致します。

## 地域問題研究所 50年の略歴

| | |
|---|---|
| 1971年(S.46) | 愛知県知事より社団法人地域問題研究所の設立認可<br>サロン誌「明日の中部」、研究誌「地域問題研究」を発刊 |
| 1972年(S.47) | 地域問題月例講座、各種研究会、学習会を通年毎月開催 |
| 1973年(S.48) | 第1次市町村企画担当者ゼミナールを毎月開催（以降毎年開催） |
| 1976年(S.51) | 総合研究開発機構(NIRA)の助成を得て自主研究「上流域山村の研究」を実施 |
| 1977年(S.52) | 第1回山村夏季大学を開催(前年の研究に基づく実施) |
| 1978年(S.53) | 季刊研究誌「地域問題研究」復刊第1号を発刊 |
| 1983年(S.57) | 国の5省庁による「東海環状都市帯整備計画調査」に参画 |
| 1985年(S.60) | 「地方シンクタンク協議会」の幹事団体として企画・運営に協力 |
| 1989年(H.1) | 瀬戸市から研修職員の受入、以後西尾市(1994)、大口町(2000)、田原市(2005)から受入 |
| 1990年(H.2) | 創立20周年記念シンポジウム「21世紀の世界を拓く地域の決断」を開催 |
| 1992年(H.4) | サロン誌「明日の中部」を会報「ちもんけん」に変更 |
| 2000年(H.12) | 設立30周年記念シンポジウム「成長する住民活動と行政サービス」を開催 |
| 2008年(H.20) | 愛知県、三河山間6市町村、大学、NPO等で構成する愛知県交流居住センター事務局開設 |
| 2010年(H.22) | 会報「ちもんけん」をまちづくり情報誌「ちもんけん」に変更 |
| 2011年(H.23) | 一般社団法人地域問題研究所へ移行（7月1日）<br>創立40周年記念シンポジウム「震災後の新たなまちづくりにむけて」開催 |
| 2020年(R.1) | 市町村ゼミナールの会場とオンラインのハイブリッドでの開催始まる<br>第1回公民連携セミナー開催 |
| 2021年(R.3) | 創立50周年特別記念フォーラム「中部のミライ創造フォーラム」の開催 |

# ～若きイノベーターとの対話からはじめる～ 中部のミライ創造フォーラムを開催しました！

当研究所の設立50周年を記念し、令和3年11月10日（水）に名古屋国際センター別棟ホールにて「～若きイノベーターとの対話からはじめる～中部のミライ創造フォーラム」を開催した。

このフォーラムは、【まちづくり・ひとづくり・ものづくり】の3つの視点から、これまでの中部地域の社会や暮らしの変化を振り返るとともに、30年後の2050年の将来ビジョンを展望することを目的に開催した。

パネラーには、中部の未来を牽引する20～30歳代の若きイノベーター6名をお招きするとともに、会場には次代を担う20～40歳代の若手の行政職員や社会人、研究者、学生などが数多く参加され、若者の視点から中部地域の未来ビジョンや政策提言について議論をおこなった。

また、フォーラム開催に先立ち、3つのテーマごとにパネラーを2人ずつお招きして、事前オンライン勉強会を計3回開催した（9月22日・10月6日・10月20日）。各2時間の勉強会では、当該分野における過去30～50年間を振り返りつつ、パネラーが取り組まれている先進的な事業の理念や内容などについてお話をお伺いした。さらに、今後の課題や方向性についてパネラーと参加者の間でオンラインを通じて意見交換した。事前勉強会及びフォーラムを合わせて計234名の方の参加があった。

## 2050中部の未来をけん引する6名のイノベーター

### 玉谷 幸代さん

MUSASHi Innovation Lab CLUE
コミュニティマネージャー／豊橋

地域のイノベーションハブとして、東三河発の新規事業創出を支援。ジェンダーギャップやアンコンシャスバイアス（無意識の偏見）を考える機会作りや、企業の中で自己実現を目指す女性の支援に取り組む。

### 玉川 幸枝さん

合同会社プロトビ・TILEmade
代表／瑞浪

「色と彩りで誰もが愛着の持てる空間づくりを行うこと」をミッションにして、岐阜の東濃地域で作られるタイルの魅力を発信し、文化を継承すべく、釉薬技術を活かしたオーダーメイドタイル事業（TILEmade）を立ち上げる。地元の活性化にむけたまちづくりにも取り組む。

### 金城 愛さん

体験型ゲストハウスdanon
代表／東栄

沖縄県出身、東栄町に移住して9年。2017年より築150年の古民家を改装してゲストハウスを経営している。食事を宿泊者の共同にて調理し、同じ食卓を囲むことが特徴。コミュニティの中で育んでもらっている。

### 河合 将樹さん

株式会社UNERI
代表取締役／名古屋

つくる人の可能性を耕し豊穣な生態系をつくる起業家エコシステムを構築。目指すのは「社会課題の解決に繋がる起業家の可能性を耕し、課題が自律的に解決される仕組みと市場をつくること」。

### 住田 涼さん

非営利型一般社団法人Nancy
代表理事／岐阜

子どもがつくる仮想都市「ぎふマーブルタウン」を軸に子どもの成長を支援。一番大切にしている想いは「すべての起点は「人」である」ということ。エジソンに伴走してその可能性を開花させた母ナンシーのように、子ども達に伴走している。

### 藤田 恭平さん

株式会社ON-CO
代表取締役／桑名

空き家活用や企業PRの会社を経営している。運営しているサービス「さかさま不動産」が有名。物件情報があって、借りたい人がそこにアクセスすることが普通だが、さかさま不動産は逆で、借りたい人の情報が掲載されている。借りたい人の想いを見た物件オーナーとマッチングしている。

## イノベーター6名と語り合う、
# 2050中部の未来を変えるキーワード

コーディネーターの三浦准教授とイノベーター6名によるパネルディスカッションから
2050未来の中部を変えるキーワードをいただきました（敬称略）

### ■熱い想いに共感して後押しをする人を呼ぶ”妖怪人たらし“

（藤田）さかさま不動産は借りたい人の熱い想いと情報を先に載せ、水道が通っていないことなど対象物件の全情報を借り手に伝える。こういう人なら安心、ということをデータ化し、熱量のある人に物件を貸したい。

（金城）東栄町の人口は現在3000人高齢化率50.1%、2050年には1500人ぐらいで落ち着くと予測。移動しやすい時代になり“交流人口”は増えるのではないか。

（玉川）私の住む岐阜県瑞浪市大湫町は人口350人。1年に1組、30代以下の夫婦を呼んでくれれば人口300人を切らない。“妖怪人たらし”となって、「いいところでしょ、また来てね」と呼び込み、呼ばれた人がまた違う人を呼び込む地域の「ハブ」になれる。

### ■似合うべき人が似合う場所に行けると良い

（三浦）地方創生の取組が進められ、“人の取り合い”の面も無きにしもあらず。

（金城）東栄町には移住ソムリエが人口3000人のうち100人いる。移住希望者に様々な窓口があり、色々な角度・感性の人が発信し、伴走してくれる。誰でもウェルカムではなく、移住が全てではない。中山間地域は地域の自立が必須であり、住民が“やりたいこと”を行政に相談をし、見守ってもらうような形が良いのではないか。

### ■人に対して投資できる中部へ

（河合）住田さんの言う投資はどのような人に?

（住田）やはり「子どもを産み育てるひと」に。私も共働きの現状で育児と仕事の両立が可能か、子どもを守っていけるのか、課題と感じている。就職する人にもアントレプレナーシップを育んでいくことは重要だと思う。

（河合）これから気候変動によって地球がなくなってしまう可能性がある。環境価値や社会価値を前提に置いたうえで経済活動を回していく“社会起業家精神”を頑張ってみなさんインストールしていこうと言いたい。

（住田）“特定多数の意見を政策に柔軟に反映させる”を目指すとあるが、そのためにどうしていきたいか?

（河合）まさにこういう場で出てきた議論を政策に反映していく“パブリックアフェアーズ”（企業・組織が、自社のビジネス環境をより良くすべくステークホルダーと対話をしていく活動）が必要になる。ダイレクトに政治や政策につなげ、転換させていくという動きがこれから重要になる。

（三浦）まちづくり・ひとづくり・ものづくりを考えていく上で、政治行政との向き合い方が非常に重要なポイント。

### ■新しい技術や人材との出会いを逃さない!

（玉川）IT化は大企業の問題で、中小企業には遠い話だと思っていた。友達がタイルのデータをみて、「これIT化しないの?」と、言ったのがきっかけで、職人の毎日の微細な変更をAIが勉強する仕組みを構築した。

（玉谷）先端技術を勉強している学生をインターンとして受け入れるのもよいのでは。

（河合）名古屋は大学も工業系が多く、ITなど専門性の高い学生が眠っており、コストや競合面で優秀なエンジニア確保が東京ほど難しくないと聞いた。

（玉川）企業側が学生のフレッシュでクリエイティブな挑戦をしっかりと受け止めることが大切。新しい価値を生み出すことにつながっていく。

（河合）自動車産業の行く末を鑑みて、中部経済連合会だけでなく愛知県/名古屋市などが起爆剤となり得るスタートアップ施策を展開している。“循環型ビジネスの定着”も重要。

### ■共に育て、共に社会参加する仕組みづくり

（玉谷）今日、娘を抱いて登壇したのは「子育て中は、仕事にならないから家にいたほうがいい」と女性自身が持つイメージを払しょくし、出産を控える女性やそのパートナーに“それも良いんだ!”と勇気を持ってもらいたいから。育休の大変さや葛藤を知った私自身がアクションし、発信することが、仕組みづくりの第一歩だと思う。

（三浦）自治体には子育て支援という枠組みはあるものの、どれだけ出来ているのか市町村ごとにムラがあるように感じる。

（玉谷）育休中でも80時間までの限定的作業は就労OKという制度や子どもの面倒を見ながら働ける制度など労務・人事制度として、その家庭や子どもの条件に応じて選択できるパターンを揃え、仕組化して社会に落とし込んでいかないと社会は変わっていかない。社内で育休者のオンラインコミュニティをつくり、先輩ママの話や実際育休を取った男性に話をしてもらう情報共有も大事。

## イノベーター6名からの「政策提言」

**玉谷さん**

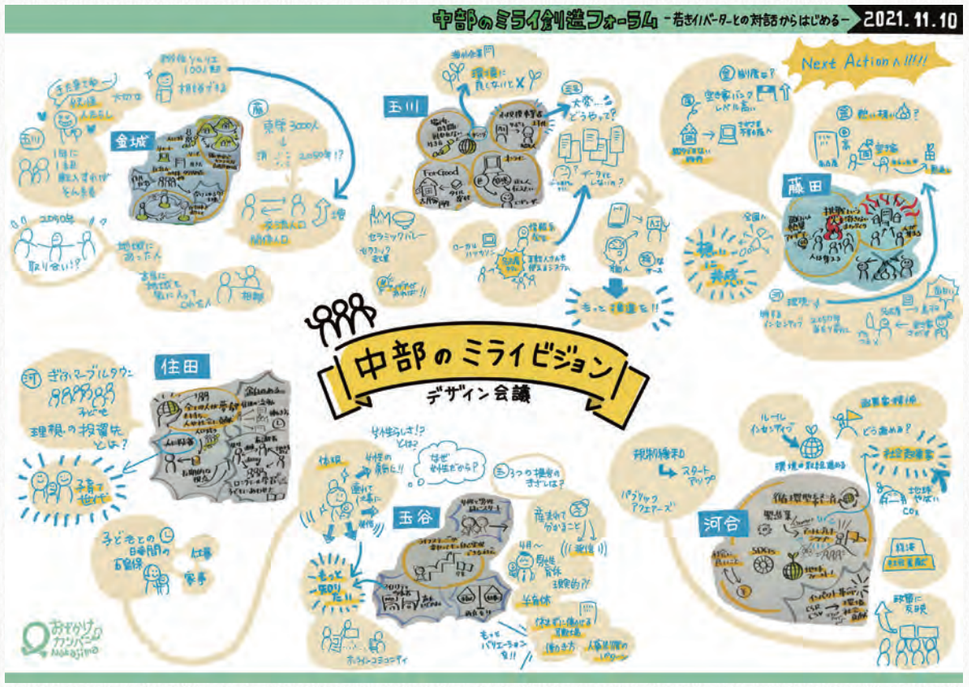
2050年には私の娘は30歳。その時には「ライフステージが変わっても、自己実現できる社会」を実現させたい。そのためには、「**子育てと仕事のやりがいを両立できる仕組みを作ること**」「**女性も男性と同じスタート地点に立てるための仕組み・支援を充実させること**」「**当事者が声をあげやすい仕組み・雰囲気を作っていくこと**」が大切。

**河合さん**

「多様な形での自己実現、全ての経済活動が社会課題の解決に繋がる自律的な仕組みが整った、世界を代表する循環型経済社会」という将来像の実現に向け、「インパクト革命」を推進する必要がある。「**全員が社会起業家的な生き方をする時代に向けた支援**」「**社会性を資本の倫理に落とし込むための会計基準の策定**」「**特定多数の意見を政策に柔軟に反映するための政治システムや日本の民主主義の再編成**」が必要。

**玉川さん**

2050年の望ましい将来像は、「場所に囚われない生き方」であり、「**小規模事業者のIT化、新しい取り組みのイノベーションの推進**」「**ECサイトや商店のオンライン化**」「**すべての企業が自分の事業を通して”FOR GOOD”な取り組みを行う世の中へ**」。



**住田さん**

「すべての人々が自分の人生に夢や希望を持ち、人や社会に貢献し輝ける社会」の実現に向けて、「**人」に投資できる中部へ**」「**人」が余白を持てる中部へ**」「**人」と連携し子を育む中部へ**」を提言。

**金城さん**

2050年、5Gで通信速度が向上し、自動運転技術やリニア中央新幹線で人の移動速度が向上する。将来像「自治体を超えて賑やかでカラフルな山間地域」と「地域のアイデンティティ」を実現するため、「**行政に頼らない暮らし**」「**多様性を受け入れる土壌づくり**」「**時代に合うカタチへのアップデート**」「**自治体を越えたつながりづくり**」が必要。

**藤田さん**

アイデアや熱量がある人をどんどん生み出していけたら。「さかさま不動産」では、そういう人のところに必要な物件が集まっている。「通常は賃料4万円だけど、きみなら無料で貸してあげるよ」そんなケースが増えている。**挑戦という熱量を消さないまちづくり**が重要。

3時間におよぶフォーラムの内容を素敵なグラレコに起こしてくださったのは
中嶋伸恵さん（合同会社おでかけカンパニー　https://odekake.co.jp/）

# フォーラムからの2050年への提言

名古屋市立大学人文社会学部
現代社会学科
准教授　三浦　哲司

今回登壇した6名は、東海地区で活躍する若手という点は共通しているものの、「ものづくり」「まちづくり」「ひとづくり」と活動フィールドはさまざまです。ただ、企画側としてはあえて多様性を重視しました。結果として、事前の勉強会においても、またフォーラムの当日においても、一つひとつの発言を聞くたびに、「そうした取り組みがあるのか」「そのような物事の見方ができるのか」「これからはそうした発想が必要なのか」と、感嘆と共鳴の連続でした。

今回のフォーラムでは、6名の登壇者に対して「2050年を見据えるとどのような将来像が描けるのか、そのために何が要るのか、また中長期的にこの地域はどうあるべきなのか」をうかがいました。詳細に関しては、紙幅の都合からも割愛しますが、6名全員から「挑戦を続ける」「世界を変える」「希望が持てる社会を作る」など、前向きな発言が続きました。こうした内容をふまえると、今回のフォーラムの成果としては、以下の2点があげられると考えます。

第一は、今回登壇した若手6名が、30年後に向けた中部地域のあり方について、「自分事」として多角的に議論できた点です。30年後というと、どうしても先の話なので、どこか他人事として捉えてしまうきらいがあります。しかし、6名の登壇者にとって、2050年はおそらくまだ現役で活躍している時期でしょう。フォーラムの当日には、登壇者から「人口減少は課題だが、30年後もまちを存続させる」「わが子が活躍できるように、ロールモデルになりたい」といった発言も聞かれました。2021年というタイミングにおいて、リアリティを持って2050年のこの地域のあり方を展望できたことは、何らかのかたちで中部地域の未来につながるでしょう。

第二は、今回のフォーラムを通じて、中部地域のあり方を考えるプラットフォームの基盤が形成されつつある、という点です。この30年のあいだに、中部地域はますます変化を遂げていくことでしょう。ただ、登壇者からの発言にもあったように、その内容が必ずしもこの地域に安泰をもたらすとは限りません。むしろ、中部地域が変化に対応できずに取り残され、30年後には明るくない未来が待っているのかもしれません。こうしたなかで、もはや特定の活動領域だけではなく、むしろ多様な主体が集い、創発し合いながら革新を起こしたり、物事を解決したりする姿勢が問われています。今回のフォーラム開催がゴールではなく、むしろ出発点です。今後において、私たちは30年後の中部地域の明るい未来の創造につながるようなプラットフォームを構築し、動かしていく必要があるでしょう。

最後に、今回のフォーラムを開催するにあたり、地域問題研究所のみなさま、名古屋都市センターのみなさま、登壇者の6名のみなさま、事前勉強会とフォーラム当日に参加されたみなさまに、あらためて感謝を申し上げたいと思います。30年後の明るい未来に向けて、これからもどうかよろしくお願いいたします。

## 「（仮）中部のミライ創造会議」のご案内（2022春 発足予定）

今回の50周年記念フォーラムを契機に、パネラー6名の講師にもご協力いただき、異業種の若手人材が集まり、年 数回のフィールドワークや勉強会、交流会などを行う、ゆるやかな学びと交流のプラットフォーム「（仮） 中部のミライ創造会議」を発足する予定で、現在準備を進めております。
行政職員、学生、社会人、市民団体・NPO、研究者…などまちづくりに関わる若い世代のみなさんは、どなたでも参加可能です。詳細は、今後当研究所のHPで改めてご案内させて頂きます。



# 1テーマレポート＆エッセイ
# 「テーマ：中部のミライ」

## eスポーツ地方創生自治体活用セミナー

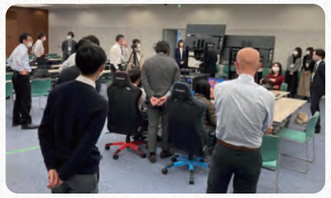
事業部長　池田　哲也

コロナ禍、様々な行動に制限が出る中で、オフライン・オンライン共に活発になっているeスポーツ。ボーダーレスで参加できる競技性のため、SDGsの観点でも期待感が高まる新興スポーツであり、全国の企業や自治体で徐々にeスポーツを活用する取り組みが増えてきています。そこで、愛知県でeスポーツの取り組みを実践する企業や自治体をゲストにお迎えし、eスポーツ自治体活用セミナーを開催しました。（主催：地域問題研究所、共催：一般社団法人ケアeスポーツ協会・（株）新東通信、協力：一般社団法人コムパス・スポルト）

冒頭、eスポーツの概要説明からスタートし、一般社団法人ケアeスポーツ協会及び安城市健幸＝SDGs課より、eスポーツを導入した介護予防や子ども向けのIT教育などの取り組みについてご紹介頂きました。

後半は、「グランツーリスモ」や「フォートナイト」などのeスポーツのタイトルを実際に参加者に体験していただきました。初めてプレイする方も多く、初対面の参加者同士で自然と助け合いながら、自分の自治体や地域における活用方策などについて意見交換する様子が見られました。また、登壇者や事務局にも実際の導入にむけたご相談なども頂きました。

今日の学びを機に、多くの自治体で少しずつオンラインツールの導入の門戸を開き、多世代交流や非言語交流（多国籍交流）のきっかけになったり、高齢者の介護予防の一助となるなど、社会課題解決のツールとして有効活用されることが期待されます。



## 「地域づくり楽校」で学びあう大学生

嘱託研究員　西村　郁

「地域づくりに関心のある学生のみなさん、行政職員や地域住民・専門家・他大学の学生とともに学んでみませんか?」地域づくり楽校は2020年春に活動開始。2年目は7つの大学から総勢23名が参加しました。初年度は専門家を招いての講座やヒアリング、街歩きを行い、どちらかというと学生さんは受け身だったのですが、2年目は各回、立候補によるゼミ長が企画運営を担当、ちもんけんはサポート役に。また、弊所が調査研究に携わる市町村での各種ワークショップや講演会にも積極的に参加しています。

第4回

メンバーが所属するゼミの紹介や研究活動についてプレゼン。建築・都市計画から地方自治、法律、多文化共生まで多様な学部から幅広い論点が示されて、とても刺激的な勉強会でした。

第6回

岩倉市を街歩き。「どんな課題があったか」「誰が実行するか、誰を巻き込むか」「何から始めるか」「何が解決できるか」をまとめてプロジェクト案を作成しました。

### 参加者の『声』

名城大学2年　福地さん
まちの発展に関する幅広い視点を得られる場となっています。専門家や他大学の学生の斬新なアイデアには、毎回驚かされます！

岐阜大学M2　塩崎さん
まちのリアルに触れる場所です。フィールドでの実践から、まちづくりにおける問題意識の認知や自分の持つ課題解決策の仮説検証ができる場です。

## 「まちづくり」の取組がつなぐ地域への想い

調査研究部長　河北　裕喜

先日、大学院生として空き店舗活用の実践研究をしていた奈良県吉野町で、当時、商工会青年部長をされていた中谷さんからFacebookでご案内が届きました。

地元コミュニティが、来訪者と地域住民、地域住民同士など多様な交流ができる笑顔溢れる場づくりのため、奈良県や早稲田大学理工学部古谷研究室のご協力もあって20年ぶりの空き店舗活用をするとのことでした。

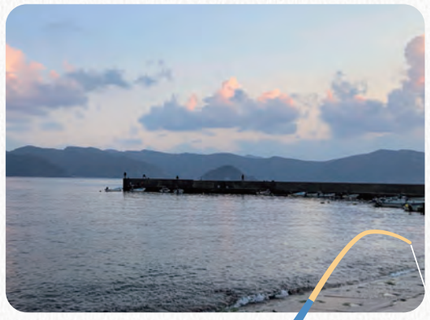
ともすれば、ハード整備やイベント的な取り組みで終わってしまうことの多いなか、当時の想いを種火として20年間守り、機が熟したタイミングで活動を再開した中谷さんに、持続的に発展するまちづくりのカタチを感じられました。

中部のミライ創造フォーラムでご登壇いただいた皆さんも、それぞれが地域への愛情や熱量を携えながら、活動を展開されています。

私も皆さんとともに、地域への想い大切にした次の時代の「まちづくり」に精進していきたいと思います。

## 海辺に臨みて思うこと

研究員　林　桃子



海釣りを趣味としています。

釣りが密を避けるアクティビティとして注目を集めているのは中部エリアも例外でなく、漁港や海岸沿いなどは釣り人が多数訪れ、日々賑わいをみせています。

視線を漁村側に向けてみると、民宿家屋が密集して立ち並び、住民同士が軒先で雑談を交わす風景がありつつも、人口減少と高齢化の影響か空き家も多々みられ、賑わう海辺とのギャップに目が留まります。

地域活性化の取り組み事例は農村地域に比べると漁村地域はまだ多くありません。今後は、現在の釣り人気に相乗りする形で漁村地域の魅力を伝える拠点を整備し、中長期的な関係人口創出や新規事業創造に繋げられないか。そんな夢を思い描きながら、今日も海に糸を垂らします。漁村集落のお仕事お待ちしております。

## 「ツール」を使いこなすとは

研究員　村西　崇弘

先日、地域問題研究所50周年記念シンポジウムを、会場とオンラインで開催しましたが、オンライン配信でWi-Fiが途切れるなど配信トラブルに見舞われ、配信が十分ではなく、大いに反省すべき事態となりました。

私達は、技術の進歩により様々なツールを手に入れ、それにより新しい生活様式の実現や生活の豊かさを手にしてきました。しかしその反面、それらのツールを導入する目的や意味を見失っているように感じています。

私が携わっている働き方改革においても同じで、改革のために様々なツールを導入することは必要な点ではありますが、あくまでもツールは目的達成のための手段であり、導入することが目的はありません。

ツールに踊らされることがないように、これからも業務に邁進してまいりたいと思います。

## 誰一人取り残さない未来をめざして

主任研究員　安間　奈巳

「中部のみらい」というテーマに、その中に自分は含まれず、周りで傍観するような感覚を持っています。それは年齢を重ね、体をはじめとするいろんなところにガタがきていることにも関係するかもしれません。主役は若い人たちという意識もあります。ついていけないと言い訳をして、ついていこうとしない自分もいると感じています。その一方で、誰か、何かの一助になれればいいなという想いもあります。

そんななか、令和3年度は、子どもの育ち、貧困、コロナ禍での女性をテーマとする課題について考える、あるいは当事者や支援者の方から意見を聴く機会もありました。統計で、数字でわかることのうしろに、なぜ起こっているのか、当事者の方々はどのように感じているのかを知り、どのような施策や支援があれば当事者の方々の困りごとを軽減することができるのか。丁寧に向き合い、少しでも生きやすくなる未来につなげていきたいと思っています。

## サッカー観戦までの時間

研究員　藤本　慎介

先日、豊田スタジアムでグランパスの試合を観戦しました。豊田市駅に到着して少し時間があったので、駅周辺をブラブラすることに。豊田市は「都心環境計画」の中で、「つかう」と「つくる」の両軸から都市空間の再整備を進めているとのこと。駅西側のペデストリアンデッキでは路上パフォーマンスをする人や、東側の芝生広場ではヨガを楽しむ人々で賑わっていました。次回の観戦は、朝から豊田市に向かい、まちなかで遊びつつ、「つくる」側の背景も探ってみようと思います。

# 市町村ゼミナール開催報告（R３年度　第３講～第８講）

自治体が直面する今日的課題をテーマに、専門家と先進自治体担当者を講師としてお招きする実践的セミナーです。地域問題研究所創設以来約50年にわたり、毎月開催しています。

## 第3講　多文化共生と地域づくり
### ～多様性を地域の活性化に活かす方策～

一般財団法人
ダイバーシティ研究所
代表　田村 太郎 氏

岡山県総社市人権・
まちづくり課国際・交流推進係
譚（たん） 俊偉（しゅんわい） 氏

田村氏は、まずは外国人雇用の全体像把握と適正化が必要不可欠で、その上で１０年先の多文化共生の担い手の育成など、計画的・体系的な施策の必要性をお話し下さいました。また、総社市の譚氏からは、総社市が取り組む「外国人防災リーダー」の育成など、市町村レベルでの多様な取り組みについて紹介していただきました。

## 第4講　深化する公民連携
### ～地域課題解決から新たな価値創造へ～

埼玉県横瀬町の渡辺氏からは、企業・個人からの提案を受けるプラットフォーム事業「よこらぼ」、富山市の中村氏からは、産学官民が連携して未来のビジョンを展望し地域課題を解決する「とやま未来共創会議」、広島県廿日市市の上田氏からは公共施設包括管理委託など民間提案・公民連携事業の事例紹介をしていただきました。

埼玉県秩父郡横瀬町まち経営課
渡辺 岬 氏

富山市未来戦略室
中村 圭勇 氏

広島県廿日市市経営企画部
行政経営改革推進課
上田 航平 氏

## 第5講　ドローン空撮技術が行政を変える!
### ～スマート災害復旧、インフラメンテナンス、農業、林業、観光～

万所氏からは「農業ＤＸ構想」をはじめ、観光や林業分野等へのドローン技術の行政活用について、また諸戸氏からは災害分野に特化したドローン活用の紹介をしていただきました。ドローン活用の場合、体力差や性差に影響が少なく、多様な分野への女性参画、女性活躍の機会となる可能性も秘めていることをお話しいただきました。

京都府ドローン普及・
技術研究プラットフォーム
万所 ルミ 氏

災害復旧ＤＸ研究
プラットフォーム
諸戸 順子 氏

### 市町村ゼミナールの「これまで」と「これから」

市町村ゼミナールの今後の開催予定内容や、これまでの開催概要を、弊所ホームページ（https://www.chimonken.or.jp/）に掲載しております。ぜひ、ご覧ください。また各種講座企画もご相談ください。



## 第6講　地方における持続可能なモビリティサービス
### ～地域に応じたMaaSの在り方～

福島大学人文社会学群
経済経営学類経済学コース
准教授　吉田 樹 氏

三重県菰野町総務課
安心安全対策室
諸岡 伸也 氏

吉田氏は、地域特性に応じた移動手段とそれをつなぐ最適なシステムの考え方、利用者に受入れられる導入方法等、地域に最適なＭａａＳの導入についてお話し下さいました。また、三重県菰野町の諸岡氏から、国土交通省のモデル事業に選定されて実用化された菰野町ＭａａＳ「おでかけこもの」について事例紹介をしていただきました。

## 第7講　浸水対応型まちづくり
### ～頻発する水害から地域を守る対策～

東京大学生産技術研究所
教授　加藤 孝明 氏

倉敷市建設局都市計画部
都市計画課
課長　角南 紀光 氏

加藤教授は、市街地の評価技術や計画策定支援システム等の最新の科学技術をまちづくりの現場に導入し、災害を意識したまちづくり手法の開発についてお話し下さいました。また倉敷市の角南氏からは、２０１８に起きた真備町の大水害の経験をふまえた立地適正化計画策定・防災指針策定の事例を紹介していただきました。

## 第8講　SDGsを活かした地域づくり
### ～様々な主体による多様な活動の展開～

福井県鯖江市さばえ
ＳＤＧｓ推進センター
センター長　関本 光浩 氏

特定非営利活動法人
ひろしまＮＰＯセンター
専務理事・
事務局長　松原 裕樹 氏

特定非営利活動法人
能登里山里海マイスターネットワーク
理事　高澤 千絵 氏

関本氏からは「さばえＳＤＧｓＢｏｏｋカフェ」など高校生や女性を巻き込む課題解決の事例をご紹介いただきました。松原氏は中小企業を紹介する「ＳＤＧｓビジネスセレクトブック」の発行、高澤氏からはマイスターの認定を受けた人材の知識、経験、人脈を活かし、持続可能な里山里海の構築をめざす取り組みについてお話し下さいました。

### 参加者の『声』

**【第3講】多文化共生と地域づくり**

名古屋市観光文化交流局
国際交流課
交流係長　深尾さん

ご講演を拝聴し、多文化共生で大切なことを確認するとともに、行政に求められる役割や新たな制度のご説明をいただき情報をアップデートすることができました。ユーモアを交えたお話で、とても楽しく勉強させて頂きました。

**【第6講】地方における持続可能なモビリティサービス**

刈谷市都市政策部
都市交通課
係長　内藤さん

複数事業者の共創特例やオープンデータ基盤など、概念が先行するＭａａＳに対して具体的な事例と実現可能なご提案がとてもわかりやすく、菰野町のバスと乗合交通再編の取組を合わせて学ぶことで、業務の参考になりました。